



評論・随筆

福田 礼輔

周南市・下関市・山口市
(1928～2016)



【著作】

- 『やまぐち菜時記』(昭和58・サンデー山口)
- 『続・やまぐち菜時記』(昭和62・サンデー山口)
- 『札の辻「鱧」の山口春秋』(平成22・文藝春秋)

福田礼(禮)輔は、子どものころから書くことが好きで、学生時代は新聞部に籍を置いた。その後、東京の出版取扱会社に就職。若くして文壇バーにも出入りし、草野心平や山之口獺らと親交を結んだ。

二十八歳の時、家庭の事情で山口に戻ることにとなり、昭和三十一年(一九五六)、山口放送の開局時に同社へ入社。ジャーナリストとしての歩みをスタートさせた。昭和三十七年(一九六二)からは下関支社で勤務。水揚げ高西日本一を誇り、日韓問題等で取材の「前線基地」だった昭和三十年代の下関で、全国から集まった記者たちとのぎを削った。その中で、当時みなと山口合同新聞の記者だった直木賞作家の古川薫や、後にサンデー山口を旗揚げする開作惇(当時大日本水産会)らとの友情もはぐくまれた。

昭和四十四年(一九六九)、山口放送山口支社長に就任し、生活の拠点が山口市に。それから遅れること三年、防長新聞社に移った開作も山口市に転居。再び親しく交わるようになった。だが、防長新聞社は昭和五十三年(一九七八)四月、その九十八年にわたる歴史に幕を閉じ、開作は同年八月、山口市域に無料配布する地域情報紙・サンデー山口を創刊させた。

開作に請われ福田は、山口放送の取締役という要職にありながら、同紙創刊八号から「やまぐち飲んで食って」の連載を開始。それを皮切りに、同紙を舞台にさまざまな文章を世に出し続けた。中でも、昭和五十五年(一九八〇)から平成十一年(一九九九)まで一千回にわたり毎週連載した「やまぐち菜時記」はその代表格。ふるさと山口の四季と味覚を、繊細な視点と軽快なタッチで描いたエッセーはたちまち人気を呼び、二度にわたり書籍化もされた。また、平成十二年(二〇〇〇)から体調を崩す平成二十八年(二〇一六)七月まで続けた「札の辻・21」も、八百十三回にわたる長期連載で、これも『札の辻「鱧」の山口春秋』として出版された。

その見識の広さと人望の厚さから、山口市菜香亭の初代館長を務めるなど、「山口の文化人」としても活躍した福田。ジャーナリストであり、執筆家であり、文化人という、地域にとって、稀有で貴重な存在だった。

(文・開作真人)



内館牧子との宴席



著書